

夕やけ小やけの赤とんぼ

三木露風

「夕やけ小やけの赤とんぼ」の歌詞

子供のころ、この歌を口ずさむと、何かもの悲しい気持ちになったものである。
歌詞もメロディーも、哀愁がこもっている。

大人になってから、日本の名曲と言われるこの歌は、親と離れ離れになった幼子の心情をうたったものだを知った。

この詩を書いた三木露風は、龍野の人だ。

露風は本名を操といった。操が五歳の時、彼の母と弟は事情があつて龍野を去り、鳥取の実家に戻つてしまう。取り残された操は、祖父のもとに引き取られ、子守りの「姐や」に日常の面倒をみてもらった。

もちろん、幼い操がこの詩を書いたわけではない。一九二一（大正十）年、露風三十二歳の時に童謡集「真珠島」で発表されたものだ。

家族というものは、居ればそれは当たり前前のことに思え、普段はその存在を深く考えたりしないものである。

しかし、母と弟が自分のもとを去り、ひとりきりになった経験をもつ露風には、家族とは居ることが当たり前ではない存在であったのだろう。長じてもなお、幼いころの孤独で空虚な思いは、心の奥から消えることがなかったに違いない。

「きつと母さんは、帰ってくる」

と、幼い操は、母の里へ続くもみじ谷へ毎日遊びに行った。そこで、来る日も来る日も、母の帰りを待った。夕やけに染まった西の空を、一人見つめる操。

龍野の美しい風景と、操のさみしい思いが歌となった。

日本中のだれもが歌ったことがある「赤とんぼ」。

露風の思いに寄り添いながら、改めてこの歌を口ずさんでみる。母のぬくもりを求め、その帰りを待ち続けた操の切ない思いが伝わり、いつの世も家族とはかけがえのないものであるのだと、しみじみとした気持ちになる。

居ることが当たり前ではない家族。

露風の幼年のころの切ない思いが、時を超えて私たちに語りかけてくる。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。